

Luwiztale

Luwis

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は、孤独だった。

世界中から嫌われているように感じていた。

いわゆる四面楚歌、というやつだ。

彼は、ゲームに没頭していた。

そんな中、ひとつのゲームを知る。

U n d e r t a l e 。

そのゲームの中の一人に、何故だか親近感を覚えた。

そんな彼は、夢を見る。

永遠に醒めることのない、現実の世界へ――。

目次

第2話	第1話
6	1

第1話

遠い昔、地球は人間と魔物が治めていました。
ある日、人間と魔物の間で争いが起きました。
長い戦いの末、人間たちは戦いに勝ち：
魔物たちは魔法で地下に封印されました。
そして長い年月が流れ：

エボット山 201X。

その山を登った者は二度と帰れないと言い伝えられています。

「……………」

日差しが暖かい。

「んー……………」

花のいい香りがする。

「ふわああああ……………」

二度寝しそうで怖いくらいだ。

「……………んん?…」

……………日差し?花?

おかしい、絶対おかしい。

自分の部屋に花なんてない。

部屋にこんな眩しい日差しが入ってくることもない。

二度寝する時なんて徹夜明けくらいだ。

夢でも見ているのかと思い、ゆつくりと目を開けると――

「……………あ」

目に映ったのは、金色の花。

狭い天井がある筈の上を見上げると、小さくあいた穴から光が差し込んでいた。

少し辺りを見渡すと、少し先に薄暗い通路があるのが見えた。

覚醒夢だとは言っても、夢にしては五感がはつきりし過ぎている。

「いつ、どこかは、まさか、これは……………」

そして、思わず自分の容姿を確認する。

橙色の線が一本入った水色の服、ほんの少し明るめの長い茶髪。

日常生活に必需品な眼鏡がなくても視界が鮮明に見える。

「……………は？」

服装もそうだが、この髪は一体。

全くもう、こんなの校則違反ですよ。

と言ったところで、この世界では校則どうこうの話ではなさそうな気がするが。

いやそうではなく、この姿には見覚えがある。

この姿は間違いなく、自分が創った姿だ。

名前は違う、しかしここにいる時点で察していたが…まさか、自分は――

「……Frisk?」

「……んえ?」

「……へあ?」

幼く感じる自分とは違う声に、思わず変な声が出る。

声のした方を見てみると、小さな子供がうずくまるように花に埋もれていた。

…正直全く気づいてませんでした。ごめんなさい。

「あれ……?」

目の前の小さな子供はきよきよと可愛く辺りを見回している。紫の線が二本入った青い服。

黄色い肌に、閉じたような目。
ああ、間違いない。この子が――

「お姉ちゃん、誰？」

「――うん？」

またまた変な声が出た。

「ああ、僕はね……」

一度冷静になり、考える。

自分ではなく自分でもある、自分の名前を。

「L u w i s、だよ」

「るいす……？」

「うん、君は？」

知っているのだから聞く必要もないが。

「ぼくは、F r i s k」

「F r i s kかあ、いい名前だね」

「ほんと？えへへえへ」

やべえめつちやかわいー、なでくり回したーい。
でも今そんなことしてる場合じゃなーい。

「それじゃあ……」

兎にも角にも、先に進まないといけない。

使い方には触れず、僕はゆつくりと立ち上がった。

「ここにずっといても仕方ないし、とりあえず先に行ってみようか」

「…うん！」

僕は、Friskと手を繋いだ。

第2話

「あつ、Luwis!だれかいる!」

そういつて一本の花を指差すFrisk。
かわええなあ。

いやそんなこと言ってる場合じゃない。

彼は僕の姿を見ると驚いた表情を見せたが、

「やあ!」

とすぐに挨拶をする。

ああ、そういえば近づいたらイベント(花による一方的な)が始まるのか。

でもこのFriskは感情豊かっぽいし、大丈夫そう。

「ぼくはFlowey。お花のFloweyさ!」

「あ、どうも…こんにちは、Friskですっ!」

Friskが慌ててぺこりとお辞儀を返している。

「始めまして、Luwisです」

僕も挨拶を返した。

…今、こんにちはの時間なのかなあ。

時計が欲しいところだ。

「ふむふむ…君達は地下世界の新人りだね?見たところ、すごく困っているみたいだね。」

「うん…どうすればいいのかわかんなくて。」

「そっか。それじゃあ、ここではぼくが先輩だから教えてあげるよ。」

あれ、会話のセリフがちよつとだけ変わってる。

ゲームのFriskは何を喋っているかなんて分からなかったからなあ。

「それじゃあ準備はいい？いくよ！」

Floweyの言葉とともに、Friskと自分の体から赤い光が出てきた。

視界が白黒になったりはないみたいだ。

「そのハートが見える？それが君達のソウル。きみの心や体の表れさ！」

「へえ…これが自分のソウルかあ」

Friskは自分の赤色のソウルを不思議そうに見つめている。

「僕のソウルも赤色だ。同じ決意のソウルなのかな？」

「きみのソウルはまだ弱いけど、Lvを上げるとどんどん強くなっていくよ。」

この言葉には偽りはない。

Lvを上げれば上げるほど、主人公は強くなっていく。

ただ、自分はそんな道を歩みたくは無いし、歩ませたくもない。

「Lvってどういう意味なの？」

Friskが疑問を口にする。

「それはもちろん、Loveのことさー！」

やっぱり会話が自然だ。

…しかし、どこか違和感を感じた。

「二人とも、Loveが欲しいよね？心配しないで、ぼくが少しだけ君達に分けてあげるよ！」

そう言うとFloweyはウインクをした。

何だろう。「キラツ☆」とでも聞こえて来そうな顔してるな。

…待てよ。

…今、『二人とも』って言った？

「ここから、Loveを落としてあげるからね…」

「小さくて白い…『友情の欠片』としてね。」

そういえばさつきも僕達のことを『君達』と呼んでいた。

自分の存在はFloweyにはちゃんと認識されている。

つまり自分はこのゲームのキャラクターになっっている可能性が高い。

突然のイレギュラーには驚いただろうが、まさか僕がplayerだとは思ってもないだろう。

「準備は良いかい？」

「さあ動いて！できるだけたくさん集めてね！」

Friskは欠片を取ろうと手を伸ばそうとしている。

僕は小さなFriskを抱きしめるように庇った。

突然、体が動かなくなった。

体が重くなり、視界が霞んでいく。

「L u w i s ? L u w i s ! ? 」

良かった。

Friskは無事みたいだ。

不思議だ。

痛みも熱さも寒さも感じない。

こんな状況なのに、自分は汗一滴もかいていない。
本当に不思議だ。

Flowyの表情もよく見えない。

ただなんとなく、悲しそうな顔をしているように見えた。